

第五回「はなやすり出版文化を考える会」資料

日時：2024年12月22日（日）

場所：名古屋国際会議場 433 会議室

— 資料内容 —

○文学者を知る 16「入江泰吉」、17「熊谷守一」、18「佐藤忠良」

19「甲斐信枝」、20「星野富弘」

○「和紙—地域の自然を活かした文化 その2」

○「熱田を知る 其の三」

資料作成 相地 透

<文学者を知る 16 「入江泰吉」>

1 基本情報

- ・写真家。
- ・1905（明治38）年生、1992（平成4）年没。
- ・20歳のときに大阪の写真店に就職し、写真家として活動を始める。大阪の人形浄瑠璃「文楽」を撮った写真で注目される。戦争中に大阪の家が消失し、故郷の奈良に戻る。GHQに仏像が徴収されるという噂を聞き、奈良の仏像を撮り始める。亡くなるまで、自分が暮らす奈良・大和路の風景、風物を撮り続けた。

2 重要である理由

・生活の延長線上にある自然と人を撮影している。身近な土地に息づく自然や文化に故郷を感じ、日本人の精神性を撮影しながら考え続けていた。奈良に息づく文化や人の営み、自然のものについて学びながら、撮影する姿勢は、写真を撮るといふことの基本的なことがらを思い出させてくれる。

・何度も同じ場所を訪ねることで、風景の移ろいを観察している。「大和の四季折々の自然の中をカメラを担いで、歩いて歩いて、はじめて、『これだ』というアングルを発見する。（中略）画家の場合は構図が大切ですが、カメラマンの場合は、その風景を切り取ったモチーフがはっきり出ていなければ、駄目です」

・「日本人は、古来自然から学ぶことが多いのです。自然と人の心が深く結びついているために、四季の変化が、精神生活にも微妙な陰影を与えています。また自分の心を自然に投影することによって、『美』を感じる民族なんですね」

3 ゆかりの土地

・奈良市……全作品は本人より奈良市に寄贈された。住んでいた家は「入江泰吉旧居」として保存され、「入江泰吉記念奈良市写真美術館」は一年を通じて写真展を開催している。

4 参考文献や資料など

- ・「大和路雪月花 入江泰吉写真人生を語る」（集英社）
- ・「回顧 入江泰吉の仕事」（入江泰吉記念奈良市写真美術館）
- ・「花大和」（保育社）

<文学者を知る 17 「熊谷守一」>

1 基本情報

- ・画家。
- ・1880（明治13）年生、1977（昭和52）年没。
- ・現在の中津川市付知出身。父親は実業家、政治家という地元の名士で、守一は大勢の異母兄弟とともに育つ。画家になってからは東京池袋に居を構え、晩年は30坪ほどの庭に植えた木々が森のようになった場所で暮らす。全国の美術館に作品が収蔵されている。

2 重要である理由

・身近な自然をよく見て、日本画や洋画や墨彩画を描いた。晩年は、自宅の庭にやって来る昆虫や花をモチーフとした作品が多い。庭は、丁寧に採寸されて、中津川市付知の「熊谷守一つけち記念館」に再現されている（まだ森のようにはなっていない）。

・母の危篤の知らせを機に30歳の時に一時、付知に戻って生活する。付知は裏木曾とも呼ばれ、木材の産地だった。付知での5年間、山仕事をし、自然を観察したことが、以降の制作に大きく影響している。この間、絵は4点しか描いていない。

・池袋の自宅では、ふくろうをはじめ、野鳥を何匹も飼っていた。現在、野鳥を飼うことは禁止されているが、当時、付知では野鳥をうまく飼いならすこと、ウグイスを育てて春よい声で鳴かせる技術などは、山男のたしなみだった。守一は東京に戻ってからも山男の心意気を忘れず、付知から送られてくる野鳥を飼っていた。

3 ゆかりの土地

- ・中津川市……出生地。現在、「熊谷守一つけち記念館」がある。
- ・豊島区……東京での居住地。住んでいた家屋と庭は建て替えられて、豊島区が管理する「熊谷守一美術館」になっている。

4 参考文献や資料など

- ・「熊谷守一つけち記念館 所蔵作品画集」

<文学者を知る 18 「佐藤忠良」>

1 基本情報

- ・彫刻家、絵本画家。
- ・1912（大正元）年生、2011（平成 23）年没。
- ・宮城県に生まれる。東京美学校を卒業した数年後、1944 年に召集される。満州への配属となり、1948 年までシベリアに抑留される。職人的な彫刻家として数多くの作品を残す。

2 重要である理由

・自然のものに触れることをとても大切に考えていた。それは、芸術家を目指す人だけでなく、子どもたちの正しい成長のために必要と考え、著書「触ることから始めよう」（講談社）の中でその重要性を伝えている。

・古木のスケッチを大切にしていた。芸術を志す人は、自分の作品制作に直接かかわることがなくても、自然をよく見て、丁寧にスケッチすることを心掛けた方がよいとしている。

・シベリア抑留時代、配給はきちんとなされていたため、食事はしっかり摂ることができていた。肉体労働者として、過酷な環境下で強制労働させられる生活の中、頭を使って何かを生み出す、身体を使って具体的に創り出す、両方の大切さを経験したと回想している。

3 ゆかりの土地

- ・仙台市……出身地である宮城県の県立美術館に「佐藤忠良記念室」が併設されている。
- ・杉並区……アトリエがあったところ。
- ・守山市……佐川急便創立 40 周年を記念して作られた「佐川美術館」があり、所蔵する佐藤忠良、平山郁夫の作品を中心に展示している。

4 参考文献や資料など

- ・「触ることから始めよう」（講談社）
- ・「木」（木島始・文、福音館書店）

<文学者を知る 19 「甲斐信枝」>

1 基本情報

- ・絵本作家。
- ・1930（昭和5）年生、2023（令和5）年没。
- ・広島県出身。高校時代より「赤い鳥」の画家をしていた清水良雄に師事する。身近な自然を題材にした科学絵本を数多く手掛ける。福音館書店の「こどものとも」「かがくのとも」シリーズで40年以上にわたり、絵本を発表。老衰のため93歳で亡くなる。

2 重要である理由

・5年にわたり、比叡山の麓で畑の跡地の観察を続けて描いた「雑草のくらし あき地の五年間」をはじめ、綿密な自然観察に基づいた絵本を作り続けた。子どもたちが読む自然についての絵本は、科学的な裏付けをおろそかにしてはいけないことを教えてくれる。

・「私の科学絵本は、幼いお子さんを自然へ誘う道具でよし、としているんです」「自然はとっても柔軟です。その扉を浅く叩けば浅く、深く叩けば深く、叩く相手の心の深さに応じて応えてくれる。多過ぎもしないし、少な過ぎもしません。知識の扉、詩の扉、絵の扉……。そりゃもう自然は扉だらけの宝の蔵ですよ。感受性の鋭く豊かな幼児期に、その扉を叩かせない法はない」

・おもに自然科学に基づく絵本を手掛けているが、「稲と日本人」など、日本の文化や伝承に基づいた絵本もいくつかある。

3 ゆかりの土地

・京都市……暮らしていたところ。多くの作品が右京区嵯峨野での観察をもとに描かれている。取材場所の選定は、「絵になる風景、観察していて他人のじゃまにならない、毎日通うので家からあまり遠くないところ」を大事にしていた。

4 参考文献や資料など

- ・「小さな生きものたちの不思議なくらし」（福音館書店）
- ・「あしなが蜂と暮らした夏」（中央公論新社）
- ・「雑草のくらし あき地の五年間」（福音館書店）

<文学者を知る 20 「星野富弘」>

1 基本情報

- ・詩人、画家。
- ・1946（昭和21）年生、2024（令和6）年没。
- ・現在のみどり市東町に生まれる。群馬大学卒業後、中学校の体育教師になるが、クラブ活動の指導中、頸髄を損傷し、手足の自由を失う。入院中に、口に筆をくわえて文や絵を描き始め、キリスト教の洗礼を受ける。退院後も草花の絵と詩を組み合わせた詩画を発表し続ける。2024年、呼吸不全のため78歳で逝去。

2 重要である理由

- ・詩人の言葉を読んでいると、信仰というものの本質は、宗旨と自分自身の対話であると気づかせてくれる。個人のものであり、人としての自分自身の在り方を問うもの。争いは、その逸脱から起きるのだと思う。

・「ただ何となく歩くのと、この村にはどういう色があるんだろう、この季節にはどっちから風が吹いてくるんだろう、この道には今はどういう花が咲いているんだろう、そういうことを見ながら、考えながら歩くというのでは全然違います。」

3 ゆかりの土地

- ・みどり市……出生地。「みどり市立富弘美術館」がある。
- ・芦北町……熊本県南部に位置する。2006年に姉妹館として開館した「芦北町立星野富弘美術館」がある。

4 参考文献や資料など

- ・「星野富弘 ことばの雫」（フォレストブックス）
- ・「季刊誌『富弘美術館』開館30周年記念特別号」（富弘美術館）

<和紙―地域の自然を活かした文化 その2>

―ひさかた和紙について―

○ ルーツ

現在の中津川市と阿智村のあいだにある神坂（みさか）峠の神坂神社に、防人・神人部子忍男（みわひとべのこおしお）が755年に詠んだ万葉歌の石碑が残る。「ちはやふる神のみさかに幣（ぬさ）奉り斉（いわ）ふいのちは母父（おもちち）のため」。幣は、紙や布などを奉納すること。本格的に和紙の生産が始まったのは、1672年に飯田藩主・堀親昌（ほりちかまさ）が始めたとされる。

○ 土地の特徴

1. 冬乾燥し、晴天が多い。
2. 浸食地形であり段丘崖より地下水が出た。
3. 南向き斜面が多くコウゾを育てるのに適していた。
4. 土手が多いため水田面積が少なく副業として導入された。
5. 近隣の遠山地方（小川路峠を越える）などから原料を移入できた。

○ 紙の用途

- ・元結…江戸時代に飯田商人・桜井文七が江戸へ出店し、「文七元結」として知られた。
- ・阿島傘…喬木村で生産されている阿島傘にも使われていた。

○ その他

長野は最盛期、岐阜に次いで和紙製造工場数第2位（2443戸）だった。その勢力は、飯山市の「内山和紙」と飯田市の「久堅和紙」が二分していた。現在、長野県内で和紙生産を継承しているのは、先の二つのほかに「松崎和紙」（大町市）、「田立（ただち）和紙」（南木曾町）、立岩和紙（長和町）があり、合計6か所。

<参考文献や資料>

- ・「和紙の話」（ひさかた和紙の会）

<熱田を知る 其の三>

15 加藤図書助屋敷跡（かとうずしょのすけ やしきあと）

徳川家康の幼時幽居地。松平竹千代、のちの徳川家康が天文16年（1547）8月、6歳のとき、織田信秀（信長の父）のため人質となって、このあたりにあった加藤図書助順盛（のぶもり）の屋敷に幽閉された。また、このあと、那古屋城内天王坊にも幽閉されたといわれる。天文18年11月、竹千代8歳のとき一時岡崎に戻ったが、再び、今川氏の人質として駿府へ行った。このとき今川氏の人質であった織田信広と竹千代の人質交換が行われた場所は、一里塚のある笠寺の笠覆寺（笠寺観音）とされる。

16 夜寒の里（よぎむのさと）

尾張の歌枕の一つ「夜寒里」の所在地については諸説ある。「張州雑志（ちょうしゅうざし）」に「春敲門（しゅんこうもん）の北、森の辺とか、本宮の森の北とか、各々の説未だ詳らかならず」とあり、また、延宝6年（1678）の「厚覧草（あつみぐさ）」と元禄12年（1699）の「熱田旧記」には大宮の北、高蔵の南とあり、現在の夜寒町あたりをさしている。かつて夜寒の里は、閑静な月の名所だったそうで、月夜、軒先でむしろを広げて砵を打つ様子が「尾張名所図会」には描かれている。なお、夜寒の地名をとった「夜寒焼」は、辻鉦二郎が明治12年（1879）頃、現在の中区金山二丁目に窯を築き、もっぱら茶器類を焼成したものである。

17 船頭重吉の碑（せんどうじゅうきちのひ）

成福寺（じょうふくじ）にある碑は文化10年（1813）、嵐のため遭難し、17か月間太平洋を漂流した末、英国船に救助され、奇跡的に生還した督乗丸の船頭、小栗重吉が、異境に没した同航者の供養のため建てたものである。最初は文政7年（1824）頃、笠寺に建てられたが、嘉永6年（1853）この寺に移された。船をかたどった珍しい石碑である。小栗重吉の出身地は佐久島。

18 妙光山 本遠寺（みょうこうさん ほんのんじ）

妙光山と号し、日蓮宗の寺院である。正安（1299～1302）の頃、日蓮の孫弟子・日澄（にっしょう）が熱田神宮内の法華堂を移し、本堂として創建したと伝えられる。創建の年代は、他に文和2年（1353）とするなど諸説ある。永禄10年（1567）8月、連歌師・里村紹巴（さとむらじょうは）が当寺に宿泊し連歌の会を催したという記録もある。かつては国宝に指定されていた室町時代の楼門があったが、昭和20年の戦災で他の堂宇とともに焼失した。

19 笠亭仙果出生地（りゅうていせんか しゅっせいち）

戯作者、本名を高橋広道（1806～68）といい、この地で生まれた。和漢の学を鈴木胤（すずきあきら）、本居大平（もとおろおひら）に学び、また早くから戯作に心を傾け、江戸の柳亭種彦（りゅうていたねひこ）に書を寄せて教えを受けた。文政10年（1827）、22歳の頃、「目附画艸紙（めつけがそうし）」を出し、のちに江戸へ出て、合巻に力を注ぎ多くの作品を残した。笠亭は師の柳亭の通音をとったもので、仙果は彼が10歳の頃、熱田神宮寺の僧・金幢（こんどう？）に可愛がられ、中国崑崙産の仙桃を贈られたことに由来すると言われる。

20 蔵福寺の銅鐘（ぞうふくじのどうしょう）

かつて当寺にあった一口の銅鐘は、延宝4年（1676）二代藩主・徳川光友の命によって置かれたもので、「時の鐘」と呼ばれ、時刻を知らせるための鐘であった。尾張藩鑄物師（いもじ）頭、水野太郎左衛門家によって作られたものである。熱田の地は、東海道随一の宿場町として栄え、また宮の渡しを控えて船の出入りも多く、とりわけ時刻を知らせる必要があった。明治維新後も熱田町に引き継がれ、明治40年（1907）、廃止となった。現在は、名古屋市博物館に保管されている。

21 白鳥貯木場「太夫堀」中水門（しろとりちよぼくじょう たゆうぼり ちゅうすいもん）

現在の白鳥公園、白鳥庭園、名古屋国際会議場周辺には、かつて白鳥貯木場（水中貯木場）があった。1610年、福島左衛門太夫正則が堀川の開削を始めるにあたり、材料置き場、船置き場として掘られた大池が白鳥貯木場のはじまりで、白鳥公園内の「太夫堀」は福島正則の官名を冠した呼称の名残である。藩政時代、尾張藩領地の木曾や飛騨の山々では伐採された木材は木曾川を流送され、白鳥貯木場まで26里（約102キロメートル）300日を要したといわれる。貯木場や堀川周辺には1000軒近い木材業者が軒を連ね、神具、仏壇、建具などの地場産業へと受け継がれる高度な木材加工技術が発達したことから、この地は「名古屋木材産業発祥の地」とも言われる。堀川と貯木場をつなぐ水門は、北・中・南の3か所あり、唯一残る前方の中水門には、橋桁の下の庇や門扉の一部が見られ、当時の面影が偲ばれる。

●自然の話＝冬の渡り鳥